

Title	パンデミックに立ち向かったNPOの活動
Author(s)	谷口, 邦彦
Citation	年次学術大会講演要旨集, 39: 176-179
Issue Date	2024-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/19609
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

パンデミックに立ち向かった NPO の活動

○谷口 邦彦（関西産業活性協議会）

kutaniguchi@nifty.com

1. はじめに

2020年1月25日（土）新年会の頃、NPO「ナルクみのお」創設10周年記念など慶賀の雰囲気であった。その矢先、横浜港に入港したダイヤモンド・プリンセス号で新型コロナウイルス感染症COVID-19が発生したとの報道がなされた。3月からは著名人の逝去の報が相次ぎ、学校やNPOなどの活動も制約を余儀なくされた。その中であってもNPO「ナルクみのお」は新型コロナウイルスの感染を回避しつつ新たな活動が工夫され、組織に定着して行った。

本研究では、NPO「ナルクみのお」の基盤構築について事例研究を通じて分析しまとめた。

2. COVID-19 環境における NPO・「ナルク」及び「ナルクみのお」の取組

2.1 COVID-19 環境における NPO・「ナルク」の取組

(1) NPO・ナルク (NALC, Nippon Active Life Club)

ナルク：ニッポン・アクティブライブ・クラブ

1994. 3. 20 設立。1999. 6. 17 認証 NPO 取得。

会員：13,633名（2024. 3 末）86 拠点

（海外：ロス，ロンドン，アムステルダム，チューリッヒ）



図1 ナルクの理

(2) 会長・創始者の追悼集と偲ぶ会

2020年本部会報新年号の座談会でもお元気なお姿が見られたナルク創始者高畑敬一会長の訃報が、2月8日もたらされた。しのぶ会も延期の中、追悼集の企画が届き、執筆。

筆者より10歳上の会長とは1990年代に、定年（当時は60歳）後の過ごし方について、語り合う機会があり、出向先の「ヘルケア産業フォーラム」でもご講演をいただく等のご縁で親しくさせていただいていたこともあり、「小杉町」がナルクのルーツ!!と題する次のような駄文を収録いただいた。

一、筆者が大阪科学技術センター理事時代、高畑様と金沢工専（現：金沢大学工学部）の同期のS氏の紹介で出会いの始まり「数年で定年、元気で世に役立つ活動を」と熱っぽく語られた姿が脳に焼き付いている。

二、WACと共催講演会：1995年、ナルク前身WACとの共催で「高齢化社会の核心を探る」講演会を共催。「うらしま太郎」（高齢者体験装具）を知る。

三、著書を拝受：2001年春、私の退任挨拶に「定年前後から始める勉強法」を戴き、「万象皆師」が座右銘と知り、私も同じく、高畑様と同じと感銘。

四、小杉は遠く：2005春、「夏に久しぶりに小杉町に帰るので、ご一緒に」とお誘いを受け、北陸路へ。氏の幼な友達の町長との席、「若い頃、北陸は遠く両親の世話もままならず」とポツリとお言葉にナルク創設のルーツここにあり、と感激した次第

五、相撲甚句を朗々と 2010 箕面拠点総会でお会いし、総会後の交流会でお聴きした最後。

翌年 2022.1.8 高畑敬一名誉会長を偲ぶ会に参列、180 名の参列。縮は相撲甚句のビデオ。

<本部から「高畑名誉会長お別れの会延期について」>

毎々、ナルク事業推進に格別のご高配をいただき感謝申し上げます。標記の件、実行委員会で準備を進めてきましたが、新型コロナウイルスが収束する状態ではありませんのでやむを得ず延期することとしました。代表の皆様、会員の皆様には、実施の案内をしました時点では 1～2 週間行事イベントの中止との政府発表があり、その後、10 日の延長、19 日には今後の新型コロナウイルスについて何らかの発表があるとのことですが、現状として、ナルクは高齢者中心の会であり、万が一参加者から新型コロナウイルスが検出されれば、ナルクの存在、存亡の危機になる可能性があり、また、実施したことに対して非難されることとなります。従いまして、お別れの会は新型コロナウイルスが終息した時点で実施することにしたいと考えています。代表各位には充分ご理解いただき、既に実施のお知らせをされている方にも早急にその旨お伝えいただきたくお願い申し上げます。

*この発信者（第 2 代会長）も不慮の事故で他界、第 3 代会長が本年就任、本部は創設 30 周年記念事業「ナルリンピック」を 11 月に開催する企画であり、一部の事業には参加を予定している。

2.2 COVID-19 環境における「ナルクみのお」の取組み

(1) ナルクみのお（ナルク箕面拠点）

2010.10.1 設立 会員：198 名（男性 70 名 女性 128 名（2024.3 月末現在）。これを東・中央・西の 3 ブロックに分けて、代表・副代表・事務局長、以下、運営委員 7 名 監査 2 名で運営している）

筆者は、創設者高畑敬一会長とは、2.2 項に記述のように長いお付き合いであり、ナルク本部には顔を出していたが、箕面拠点に入会したのは、箕面拠点が独立した 2018 年である。

(2) 「ナルクみのお」のコロナ渦における活動

2020年1月25日（土）新年会の頃、ナルクみのお創設10周年記念など慶賀の雰囲気。2月・3月はダイヤモンド・プリンセス号や欧州の状況悪化を見ながら、年間事業の見直しに着手。

筆者は、2020年度のナルクみのおでは、運営委員（書記）・中央ブロック（78名）の長として、三役の審議動向を運営委員・ブロック員の意思疎通に注力。（2022年度・2023年度は事務局長、現・イベント担当）

(3) 活動への取組環境

4月は事務所が入居する市の施設のロックアウトで毎月の運営委員会も開催できず、パソコン・ホームページの運用も不可。（1名のみ限られた時間入室）。そのような環境で、代表・副代表・事務局長の三役は、事務局長の発案を受けて屋外で木箱を机に三役会議を開催されていた。

会報も、通常、見開き表裏4面であったが、4月号・5月号は表裏2面ではあったが、編集部の尽力で欠号なく発行・全員に配布された。

(4) 総会は書面審議

5月準備・6月の総会等は書面審議（ハガキ回答）で、乗り切るも、2022年度を如何にするか、呻吟の時期を迎えつつあった。

3. 「なるく箕面」から「ぶらナルク」への展開

このような環境の中で、それぞれの立場で取り組んできた「禍を転じて福となす①」（4.1）、「同

② (7.4.3) 「同③」 (7.4.4)、尚、①②③は「ナルクみのお」代表の発案によるもの「活動が停滞している事業」(7.4.5)、「ぶらナルク」について(7.4.6)、筆者が如何に取り組んできたか(7.4.7)、事例を中心に記述する。

3.1 「なるく箕面」の展開

(1) 「禍を転じて福となす①」ミニ交流会

7月、多人数の会合は避けるようにとの行政指導に対応すべく、他ブロックから「数名で集まる・ミニ交流会(予算付)」の提案。この制度活用で総計63回・219名(内、中央25回・89名)の交流会、その内容も、喫茶、会食、ミカンやイチゴ狩りなど多彩。

中央では会報を配布する組織として10班を設定し、リーダーを置いているが、この枠を越えた交流会も設定され、次年度は更なる交流会を企画・期待したい。

(2) 「禍を転じて福となす②」多様な屋外活動の企画

これまで有志で行われていた「街中クリーンウォーク」の制度化、箕面市公認の「ラジオ体操」の新設、これまで室内で実施していた「健幸サロン」の屋外化、等フレイル対応のプログラム充実。

(3) 「禍を転じて福となす③」ホームページのブROM化、外部からの操作

前述したような事務所のロックアウトへの対応として、ブROM型ホームページの開発と限られた担当役員による運用が2020.11から始まりナルクみのおの予定、活動結果が日々把握できるようになった。

(4) 活動が停滞している事業

ナルクみのおの大きな柱である高齢者施設におけるボランティア活動の中で、屋内活動は残念ながら、2020年7月からストップ状態であったが少しづつ回復している。

3.2 「ぶらナルク」の展開

「ぶらナルク」は、企業の医療プロジェクト(1979~1993)、(一財)大阪科学技術センター(1993~2001)、文部科学省・産学連携コーディネーター(2001~2010)、農林水産省・産学連携コーディネーター並びに大阪大学・大学院博士後期課程(2011~2016)に大学の博物館を訪問する中で地元住民の訪問が必ずしも多くなく有効に活用されていないことに鑑み、

「ナルクみのお」で企画・推進してきた事業である^[1]。

表1 「ぶらナルク」参加者数

これまでの参加者数を表1に示す。

会員外のみで企画した阪大博物館見学者を入ると、100名は越えており、当初の想いはある程度達成しつつあると考えている。

コロナ禍で新たな市外活動は立案し難い環境にあるが、折しも、箕面市郷土資料館では「箕面の自然と昆虫~身近なところから考えるSDGs」開催中。早速、会報への掲載、会員へのPRを行い、ナルク箕面から7名と5名の2グループが見学。

なお、5月22日(金)~8月26日(水)の開催期間中の見学者は2,639名で毎日平均36名の見学者があったこととなる。幼少時の手塚治虫氏の昆虫採集の展示などで小中学生の見学が多かったのではと思われる。

	博物館	ナルク会員	会員外
2017春	阪大博物館	17	
2017秋	京大博物館	11	
2018春	関西大学	12	
2018秋	京大天文台	10	17
2019春	阪大・吹田	9	8
2019秋	関西学院大学	8	4
合計		67	29

3.3 コロナ禍における個人的な情報環境

コロナ禍で、移動の制約は受けており、東京に出る機会は激減しているが、多くの講演会・研究会・学会 他、オンラインによる講演会・セミナーが増加し、情報・知識入手の面では、実り多い期間ではあったと感じている。

とりわけ、東京で開催される講演会については、一泊二日や終日、会場に釘付けにされることなく、希望する時間を割り、多くは、講演の概要をPDFなどで入手が可能であり、効率的な情報入手が容易になっている。

また、折しも、大阪大学ESS・OB会員に嘗ての環境大使やUSA在住者などとメーリングリストで情報交換するなど研究の環境にプラスになる環境確保にも恵まれている。

3.4 コロナ禍における環境整備



図2 病院における軽食卓（例）



図3 マスクの要請



図4 消毒器

最近、大学・病院などの軽食卓には、「隔壁の整備」、「黙食の要請」（図2）が多くみられる」図「マスクの要請」（図3）、「消毒器」（図4）は一般化している。

そして、ショッピングセンターなどでは、小さな子供が、ショッピングカートを手にする時、きっちりと消毒紙に消毒液をスプレーし、ハンドルと拭いている光景をみると教育の力を感じる次第である。

4. おわりに

中央政策としてはコロナにはピリオド「。」が打たれたが、地域政策や地域NPOにとっては、一つのコマ「、」であり、これからも地道な取り組みやこの視点からの研究が求められていると感じている。とりわけ、最近、コロナに罹患する例を見ると「、」と「。」との混同を感じることもあり、大人への理解を深める必要性を感じている。

また、最近、コロナに罹患して回復後も、余病に苦しむ事例に接することがあり、ナルクみのおや同窓会においても、死亡事例や回復後も苦しむ事例があり、然るべき時期にまとめたい。